

9 千葉県／齊藤 美津江(88歳)

亡夫へ声の恋文 齊藤 美津江

私は「千の風になって」の歌が好きです。

なぜなら、団体の長として活躍した亡夫(つま)は、
きっと千の風になって、大空を吹き渡っていると想うと和やかな
気分になるからです。

過ぎし仲秋の穏やかな日、庭のベンチに腰かけて
大空のまほろを仰いでいると、温かい座布団のような白雲が
千の風に吹かれて我が家の方へ流れてくる

「ああ。」

あの白雲にきっと亡夫(つま)がいるに違いないと想うと、
急に恋しくなって私は声をかけた。

「ネェ、二人で、お茶を飲みましょうよ。」

と呼びかけると

「オオ、すぐ行くよ」

と声が聞こえたのは幻で、すぐ山彦が返って来た。

何とも空しくなった私は、

見上げる視界を過ぎりゆく白雲に、又声をかけた。

「いつかきっと我が家の空に来て下さいね。待っています。」

と視界から消えるまで、じっと見送った。

その日の夜半に夢の中で、再会を果すことが出来たが、

それが夢であっても、とても嬉しかった。

亡夫と、永訣した日より早や十三年になる。

先日住職を招き親族(うから)らと共に十三回忌の法要を静かに
修した。

千の風に流れる白雲の声の無き世界にいる亡夫は、これからも
私の心の中で、生き続けて行きます。

かつて白雲に呼びかけたことを、私は決して忘れない。

だって、それは亡夫(つま)への声の恋文だから。 了